

ヴァイマル時代における勤労女性と余暇

斎 藤 哲

1. 余暇の形成

〔1〕 ドイツ労働者階級の生活様式はヴァイマル時代に根本的な変化を被った。その変化は2つの文化的傾向、すなわち労働者に特有の生活環境と結びつき、固有の価値観と行動形態によって形成される日常生活の総体として把握される労働者文化⁽¹⁾と、商品化と余暇によって特徴づけられ、階級の差異に関わりなく存在する大衆文化との競合関係の中に見ることができる⁽²⁾。この競合関係は基本的にはヴァイマル時代だけに出現したのであり、ナチス時代には商業化された大衆的余暇文化と大量消費に結びついた生活様式が一般的となる。それは最早、労働者階級に特有の生活様式なのではなく、諸階級に共通した生活様式なのである。

労働者に固有の文化と、労働者に限定されない大衆文化との競合関係の中で、ドイツの主として都市勤労者、すなわち労働者及びそれと経済的に見ればほとんど差のない中下級の職員層（官吏、事務職員、商店員等）の間で、1920年代になると、仕事の後の「自由」な時間を余暇として捉える意識と行動が発展してきた。今日、この余暇の一部を構成する都市の消費文化を「黄金の20年代」の代表的な側面として考えがちであるが、もとより、通常の労働者や職員層の家庭にあっては、1920年代は決して「黄金」の時期で

はなかった。労働者や職員は周期的に失業の嵐に見舞われ、彼らの存在は根本的に不安定であった。余暇を仕事の後の「自由」な時間と理解する限り、失業者に余暇が存在しないことはいうまでもない。ヴァイマル時代の労働者や職員の存在が失業によって根底的に規定されているとするならば、彼らにとって余暇とは、人生の束の間、ほんの一時期のことではなかった。

それにも拘わらず、当時の労働者や職員層、総じて都市勤労者について余暇が問題となった場合、そこには次の2つの側面が存在していた。第1に、1920年代に労働者や若い女性職員、商店員たちの余暇の過ごし方を問題として論じたのは、主として有産市民層であった。すなわち、労働者が仕事の後に「自由」な時間を持つようになったことは、敗戦と革命、天文学的なインフレーション等によって、その安定性を崩されてしまった有産市民の生活を、なおのこと不安定なものとするのではないかという不安感が、彼らをして労働者の余暇の問題へと向かわせたのである⁽³⁾。労働者をはじめとする都市勤労者の余暇は、第1次世界大戦後のドイツ社会の変化を象徴していたのである。第2に、労働者をはじめとする都市の勤労者による余暇の享受が1920年代に問題となるということは、この時期に都市の勤労者、とりわけ労働者の生活にある大きな変化が生じていたという事と密接に関連していた。つまり、この時期は、労働＝工場、居住区、労働者組織の三位一体によって形成され、労働者がそこで自己のアイデンティティを確認できたような、労働者に固有の社会的な生活環境が急速にその意味あいを失っていく時期であり⁽⁴⁾、余暇はこのような変化との関連で問題となってくるのである。だがこの場合、労働者的生活環境の中で行為する主体として想定されていたのは、すでに多くの指摘があるように、男性労働者であった⁽⁵⁾。ところが、労働者文化と大衆文化という2つの文化形態の競合関係のなかで、都市勤労者の余暇が旧来の男性中心の労働者文化、あるいはより正確には労働運動文化の担い手の側から鋭く問題視されるようになるのは、主として女性についてであ

り、また、男女を問わず若い独身世代についてであった。言い換えれば、労働者生活世界の中での行為主体たる「労働者」として暗黙のうちに想定されていた、労働組合に所属する既婚男性の熟練労働者にとって、余暇が自らの生活様式の側方を突く一つの問題領域として現れたのである。

さて、ヴァイマル時代に労働者や中下級の職員層に仕事の後の「自由」な時間が余暇として現れたとしても、例えば労働者の場合でも世代と性によってその現れ方は異なっていた。このことは余暇をいかに創り出すかという点でも、また余暇をいかにして過ごすかという点でも言えることである。ここで重要なことは、人々が仕事の後の時間を余暇として過ごすことの中には様々な願望、期待、要求、それらの実現を望む気持ち等が含まれていることである。いうまでもなく、人々の要求や期待は特定の社会集団、ここでは階級としての労働者に固有の経験に由来する側面を持つと同時に、個々人に即して見るならば、要求や期待は個々人の具体的な体験の中から生まれてくる。まさにそれ故に、願望や期待は世代や性によって異なるのがいわば当然なのである。そうであるならば、余暇をいかに過ごすかということの中に、ある世代の人々の、また男女何れかの性の、どのような体験が潜んでいるかを問うことは、労働者階級の被った生活様式の根本的な変化の具体的な内実を明らかにするという意味で重要である。他方、余暇がある集団に固有の価値観、行動様式によって形成される日常生活の一部をなすものであるならば、余暇はそのようなものとして文化をなしている。そして労働者階級の文化も内部に多様な生活の様式を持つ、複合的な文化である。それ故、労働者階級の余暇のあり方はこの階級内部の世代間の関係、両性間の関係に即して捉えられる必要がある⁽⁶⁾。

余暇の利用に関して、世代と性によってどのような違いがあるのか。本稿ではこの問題を主として女性に焦点をあてて考えてみたい。男性については女性との関係で間接的に述べられるにとどまる。問題解明のために、一方で

は未婚の女性労働者あるいは職員や商店員を取り上げ、他方では既婚の女性労働者を取り上げる。女性たちが余暇を過ごそうとする時、そのことが家庭内外での女性の位置にどのような影響を与えたのかを見ることによって、都市の勤労女性の生活様式がヴァイマル時代にどのように変わったのか、その変化と2つの文化の競合関係とはいかなる関係を持つのかを検討したい。

〔2〕 ヴァイマル時代になされた女性の生活ないし労働の世界に関する様々な調査⁷⁾は、就労している女性、特に労働者と職員の、仕事と家事以外の時間＝余暇に関する意識と行動が様々な要因によって形成されていることを示している。女性就労者の余暇に対する関わり方——それ自体プロレタリア女性の存在の一側面であるが——を規定する要因のうちで、特に重要なものは家庭生活における再生産機能を女性がどのように果たしているかという事である。何故なら、女性は就労行動において差別されるばかりでなく、家庭内においても、家事を専ら負担しなければならないということだけからも差別される存在として、仕事のない時間の過ごし方、それについての意識の点では男性の場合と決定的に異なっている、と考えられるからである⁸⁾。家族の再生産は、通常、男女間の役割分業を基礎とした家庭内分業を通じてなされる。いうまでもなく男女間の役割分担は、男性が家庭外での生産過程に組み込まれ、女性が家族の衣食住全般を管理する形でなされる。しかしながら、この役割分担は労働者の家庭でははじめから一つのフィクションとしての性格を有していた。何故なら、男性の賃金は家族を養うにただけのものではなかったからである。こうして、女性と子どもが家計補助のために様々な家庭外労働をすることは当然のことであった。だが、この場合も女性が家事を担当するという男女間の役割分担の形は基本的に変わらなかった。女性の二重負担といわれる所以である。要するに、男女間の性差は、女性のみが多重負担を引き受けるような、男女間の位置関係として現れるのである。更に、

このような事情は労働者階級の女性だけに限られるものではなかった。小ブルジョワの子女たちも、その少なからぬ部分は、たとえ結婚するまでの短い間であるにせよ、就労することを必要としていた。その多くは企業の会計係、タイピスト、その他の事務職員、電話交換手、あるいは商店員として働いた。しかし彼女たちの場合も、就労活動は結婚までと考えられ、本来あるべき場所は家庭と想定されていた。まさにそれ故に、例えば、第一次大戦前には女性問題とは働く未婚の女性の問題であるというような考えが通念とされていたのである⁽⁹⁾。そして、このような考え方はヴァイマル時代にも、労働者や職員の余暇が一種の「社会問題」化したとき、若い未婚女性がその焦点となるという形で現れた。

女性の本来いるべき場所が家庭であるという社会的な了解のもとでは、ヴァイマル時代の失業の嵐は女性たちにも襲いかかった。特に 20 年代半ばの合理化の進展は単に工場だけではなく事務職の分野でも遂行されたから、多くの女性が解雇されたし、また 29 年以降の恐慌の中では、特に既婚の就労女性を標的とした「共稼ぎ反対」キャンペーンが展開され、女性を家庭に戻すことが試みられた。このように、女性の役割を家庭の領域に固定する性差役割分業を女性に強制するような社会的な圧力が、ヴァイマル時代には一貫して働いていた。勤労女性にとって余暇の意味が問題となってくるのは、このように牢固として存在している性差役割分業との関連においてなのである。

ところで、ヴァイマル時代のドイツでは、現在の我々の場合と同じく、女性が責任を持った家族の生活の少なからぬ部分は家庭外の制度によって管理されていた。特に、生産過程での労働に就くために必要な労働力を再生産する手だては、教育制度についてはいうまでもなく、健康面については国家による保険制度、余暇については商業的な制度、または国家や自治体による様々な余暇制度等の形で、家庭外に用意されていた。こうした制度の存在は女性の二重負担を解消するものではないが、女性が家庭内で果たすべき役割と、

その遂行を通じて形成される他の家族成員、とりわけ男性に対する関係とに影響を与えるであろう。

ヴァイマル時代の家族の再生産に関して重要な位置を占めたのは教育の問題である。ヴァイマル時代には、労働者の家庭でも子どもの教育とその将来のよりよい生活への関心が高まった⁽¹⁰⁾。家族成員が労働過程にできるだけ困難なく適合できるよう、肉体的のみならず精神的にも休養を与えることが家庭の、従って性差役割分業の下では主として主婦の重要な任務であるが、今や労働過程への適合と将来の生活保障のために学校教育と職業教育とが家庭の関心を占め、この両面の教育から生じる緊張を緩和することもまた家庭の重要な機能となるのである。このような子どもの教育とそこから生じる問題に専ら女性に関わるのか、それとも男性も関わるのか、その場合、男女の関係はどのようなものであるのかという問題もまた、家族の再生産への女性の関わり方を規定する重要な問題であり、従って女性就労者の余暇のあり方を見る場合にとりあげるべき問題の一つとなるのである。他方、教育が公的な学校制度の下で果たされることは、労働者文化の中で重要な位置を占めていた労働者教育運動に対してばかりではなく、家族内での世代間の経験の伝達、居住区や労働現場での仲間との交流、経営者や警察との紛争等を通じて果たされていた若年層の社会化に対しても影響を与えるが、他面、教育の機会を得ることは、労働者の子女に親の世代の知らない展望を与え、私的な場面での様々な問題解決の手段を拡大させる可能性を与えることにもなった。まさにそうした可能性があるからこそ、親は子供の教育への関心を高めたわけであるが、その結果は余暇の過ごし方における世代の差を作り出すことにもなったのである。

以上のように、余暇の過ごし方と家族の再生産の問題は相互に密接に関連し合っている。女性による家族の再生産機能の遂行が常に、性差役割分業を基礎とした男性による女性支配と関連し、また家族の再生産のために使われ

る仕事の時間と仕事外の時間との区別がつかないという家事労働のあり方からして、女性の余暇の過ごし方、あるいは余暇を「自分のため」に過ごせるようにするその仕方は、女性による独自の生活様式の形成であり、女性の「解放」の一つの現れでもあるということになろう。ここに述べた全ての側面を取り上げることはできないとはいえ、本稿では就労女性の家事労働のあり方と関連づけて、余暇がいかなる形で過される場合に、それは就労女性の「解放」、「自立化」へとつながるのか、ということを考えたい。

〔3〕 以下の行論の前提として、ヴァイマル時代の工場労働者一般と女性就労者の労働時間について、簡単に見ておこう。

1920年代が余暇の時代であったとしても、いうまでもなく、商業的な大衆文化の形としてであれ、伝統的な労働者文化の形としてであれ、労働者階級の誰もが余暇を余暇として享受し得たわけではない。このことは単純に、余暇として利用可能な時間の面からも言いうることであった。

1923年12月21日に発布された労働時間に関する法律は8時間労働日を規定していたが、1924年4月の労働大臣による施行規則によって、多くの例外規定が設けられ、その結果、労働総同盟の1924年の年報には「8時間労働日は消滅した」と述べられたのである。事実、1924年には労働時間は週平均50.4時間に達していた⁽¹¹⁾。全体としてみるならば、1928年までには労働時間は次第に短縮され、60%以上の労働者が週48時間以下の就労となったが、それ以前には完全就業者の半数以上は週48時間以上就労していたし、分野により就業時間はまちまちであった。例えば、家内産業として営まれることが多く、また女性の就労が伝統的に多かった繊維産業の場合、1924年には全体の82%以上が、1927年でも約75%が48時間以上就労していた。同じ時期に金属産業ではそれぞれ約63、57%が、また化学産業では44~5%が48時間を超えて就労していた⁽¹²⁾。更に1928年10月の時点で工場労働者

のおよそ20%は51時間以上働いているか、あるいは短時間労働者であった⁽¹³⁾。だが大雑把に言えば、1924～8年には労働総同盟に組織された労働者のおよそ76～81%は週に48～54時間を働いていたのであり⁽¹⁴⁾、これが全体の傾向を反映しているとすれば、余暇が問題となるのも、労働時間の面から言えば、これらの労働者についてであった。なお、ここで余暇を過ごす上で極めて重要な長期休暇について触れておけば、すでに帝政期に僅かながら存在していた長期休暇の制度は、ヴァイマル時代にはいと制度として本格化した。すなわち、1920年には賃金協約を締結している労働者の未だ約66%程度しか休暇を認められなかったが、25年には86%以上が、更に29年には90%以上の労働者が、勤務年限に応じて、年に3～14日の休暇を得たのである。戦前からすでに制度が定着していた職員の場合には、ヴァイマル時代になると2～3週間の休暇が普通であった。とはいえ、本稿で主として取り上げる未婚の若い女性の場合、恐らく全体の60～70%は年に1週間以下の休暇しか得られなかったであろう⁽¹⁵⁾。

以上のように労働時間は48時間程度にまでなり、また休暇制度も存在していたとはいえ、そこから生まれる余暇を享受しうる可能性がこれら労働者の全てに開かれていたわけではない。ヴァイマル時代の勤労者は繰り返し失業の嵐に見舞われ、就労と失業の間で不安定な歳月をおくっていたからである。「ドイツの労働者階級は資本主義の歴史の中では前例がないほどまでに、生産過程の中に投げ込まれては再び投げ出される」⁽¹⁶⁾という状態におかれていたのである。そうした状況の中で、余暇の享受という点から見て最も可能性に乏しかったのは農村住民、とりわけ農業労働者であり、次いで二重負担から逃れることのできない既婚の女性労働者であった⁽¹⁷⁾。

ここで特に女性労働者の労働時間について述べておけば、ドイツ繊維労働者組合の調査によれば、1928年に繊維産業で働く女性の労働時間は、就労時間と家事のための時間を合わせて1日13時間45分であった。このうち8

時間 45 分が職場での時間であり、5 時間が家事のための時間であった。繊維産業の労働時間は他の分野に比べ幾分長く、例えば金属産業の場合、86% の女性労働者が 8 時間労働日であった。しかし就労時間の差は家事を含めた全労働時間の長さから見れば僅かなものでしかない。加えて、4000 人の女性労働者を対象に行われた調査によれば、約 3 分の 1 の女性は通勤時間に往復 2 時間を見込まねばならなかった⁽¹⁸⁾。これらの数字からも分かるように、女性労働者、就中既婚女性労働者の場合、労働時間の面から言えば、余暇を享受しうる可能性は極めて限られていた。こうしたことを考慮すれば、労働時間が 48~54 時間で、余暇を享受しうる労働者を 27 年の末で全勤労者の精々 3 分の 1 にしか当たらないとしたレックの数字はあながち誇張ではない⁽¹⁹⁾。しかしそれでも、二重負担に苦しむ既婚女性労働者まで含めて、余暇ということが問題となったところにヴァイマル時代の特殊性がある。

1920 年代の余暇の享受者を世代的に見るとき、特に商業的な大衆文化として提供される手段を享受しうるのは、当然の事ながらそうした手段に現金を支出しうる人間であり、従って労働者の中でも比較的安定的に仕事に就き、且つそれにより恒常的な収入を得ることのできるものが一つの極を形成していた。具体的にはそれは既婚の熟練した労働者とその家族であり、あるいは一定ランク以上の職員層とその家族であった。だが周知の通り、ヴァイマル時代にはこれらの層と並んで、25 歳以下の独身青年男女が、就業者であろうとなかろうと、労働者であろうと職員であろうと、余暇を享受する社会層のもう一つの極をなしていた。後述するように、彼らにとって余暇は商業的な大衆文化の手段を媒介とした仲間との共通の時間、その中での行為として存在するか、あるいは労働者文化運動を通じての余暇や「青年団体の制度化された余暇」として現れたのである⁽²⁰⁾。

2. 未婚女性就労者と余暇

〔1〕 今世紀初頭以来、女性、とりわけ家庭外で就労する労働者階級の既婚女性にとって、家事を含めた労働外の時間の拡大は端的に「進歩」と受け取られた。なぜならば、そのような時間の中に、女性にとって「自由」な時間が存在すると感じられたからである。二重負担に苦しむ勤労女性の間でさえもこのような受けとめ方が現れたこと自体、女性の就労をとりまく環境に変化が生じたことを示している。それはともかく、本稿ではこれまで、家事を含めた労働以外の時間を「自由」な時間、余暇ととらえてきたが、正確には、そうした時間が直ちに「自由」な時間となるわけではない。そこにはまだ、自分自身の労働力を再生産するために必要な休息時間も含まれているからである。この休息時間を除いた、どのようにでも自分のために「自由」に使うことのできる時間が本来の余暇であった。従って、余暇とは個人にとって、あるいは社会にとって特定の意味を持った時間なのであり、その意味とは「自由」な時間になしうる行為、行為の選択可能性と結びついている⁽²¹⁾。このような余暇が労働者階級にとって生まれてくるのは決して古いことでなく、ようやく第一次世界大戦後のことであった⁽²²⁾。

19世紀以来一貫して拡大傾向にあった女性の家庭外就労は、今世紀に入ってからヴァイマル時代末期まで止むことなく続き、就労可能年齢(16～65歳)にある全女性中に占める就労者の割合が、1907年に30%を超えてから、1925年には約35%に達し、それ以降その割合はほぼ一定していた⁽²³⁾。1925年の全国就労調査によれば、工業及び手工業で働く女性労働者の数はおおよそ220万人で、内190万人が女性工場労働者であった。だが、ヴァイマル時代に入々の注目を集めたのは女性の事務職員及び商店員の増加であり、1907年から1933年の間に、工業分野での女性職員数は約5倍に、商業分野では

約 2.2 倍になった。1925 年には工業分野で働く職員の約 3 分の 1、商業分野では約 45% がそれぞれ女性であった⁽²⁴⁾。女性労働の重心は工場労働から事務職員あるいは商店員へと移動していたのである。そして、主として事務職員と商店員からなる職員層のこうした急速な増加故に、当時、女性職員層は勤労女性の典型とみなされた。年齢的には、女性就労者中最も多い年齢層は 20～25 歳であり、1925 年には全体の 51.8% は 25 歳以下であった⁽²⁵⁾。中でも女性職員層の 65% がこれら若い女性たちであったが、その中では商店員のほうが事務職員よりも若く、半分以上は 20 歳以下であり、30 歳を超えるものは 10% 程度であった⁽²⁶⁾。また女性職員層のほとんどは未婚であった。他方、全女性就労者の約 32% は結婚しており、女性工業労働者の 21～28% (1925～33) が既婚女性であった。また、工業労働者の妻の約 4 分の 1 が家庭外で就労していた⁽²⁷⁾。言い換えれば、労働者の妻の圧倒的多数は専業主婦であったのである。家庭外で就労している既婚女性の大多数には子どもがいた。

就労女性の多くが 25 歳以下であり、既婚者は全就労女性の 3 分の 1 程度であることから窺えるように、女性たちは独身時代に就労し、結婚を機に退職することが一般的であった。そして、結婚後はパートタイマーとしてあるいは数年おきに就労することが珍しくないとはいえ、その主たる労働の場は家庭となり、家族の再生産のための活動が女性の任務となる。家事や育児にかかる時間と肉体的な負担の大きさを考えるならば、就労女性について余暇が現実性を持って現れるのは既婚女性の場合であるよりも、未婚女性の場合であることは明かであった。ヴァイマル時代に新しい女性像が生まれてきたとき、それがスポーツ、ダンス、映画、モード等々、商業文化を中心とした余暇文化の発展と結びつき、若い未婚の勤労女性の姿と重なったのは、決して偶然ではなかったのである。それでは短い就労期間に若い女性たちはどのように余暇を過ごし、それは彼女たちの人生にとってどのような意味を

持っていたのか。

〔2〕 1920年代に工場や事務所、官公庁、商店等々で女子工員、速記者、タイピスト、会計係その他の事務員、商店員、さらには教師、ソーシャルワーカーなどとして働く若い女性たちは、大体1900年以降の生まれであり、その多くが都市に居住していたが、大半は親と同居していた。一般にヴァイマル時代の女性の給料は男性の60～70%程度であるが、女性職員層の約80%は1920年代末頃には月収200マルク以下であり、25歳以下では大半は160マルク以下であった（いずれも税込み）。20歳以下が大半を占める商店員の給料が事務職員よりも低かったことはいうまでもない。労働者の場合、業種、職種、地域等による差が大きく、一概にその標準的な収入を示すことは困難であるが、ある調査によれば、繊維産業で働く女子工員の場合、ほぼ70%は週給16～30マルクで、18歳から24歳までの年齢層では週給21～25マルクが最も多かった⁽²⁸⁾。

総じて女性の賃金は高くはなかったが、独身女性の場合、その乏しい収入の多く（80～90%）を家計の足しとして親に渡さねばならないなど、同年代の男性に比べてはるかにその自立性を制約されていた⁽²⁹⁾。独身女性たちの多くがそのことに不満を持っていたことは、当時すでに、自分の収入を自分で処理することは当然のことであると彼女たちが考えていたことにも表われている⁽³⁰⁾。それでもとにかく彼女たちがささやかではあれ「自分の金」を手に入れることができたことは、彼女たちが親からの経済的な独立性を得ることを意味したばかりか、行動面でもいくらかの自由を得ることを可能にしたのである。

彼女たちは平日は家事を手伝うことが期待され、また実際そうすることが普通であったが、少なくとも週末はそれを免除されて、映画に出かけ、ダンスを行い、ウィンドウショッピングを楽しみ、スポーツ観戦をし、更にはハ

イキングに出かけ、あるいは様々な労働者文化運動や青年組織の活動に参加した。女性の完全就業者であれば、年に3～6日程度とることのできた休暇は、既婚女性の場合、家事を中心として家族のために使われることがほとんどであったのに対して、1900年以降に生まれた若い女性の場合、特に未婚であれば、親族を訪問するためが大半であったとはいえ⁽³¹⁾、地方に旅行に出かけたりする事で「自分のため」に使われるのが普通であった⁽³²⁾。独身の女性工場労働者たちは自分たちの余暇の時間が少ないとは感じていなかった⁽³³⁾。余暇の過ごし方に男女の差がなくなったばかりか、18歳前後からは彼らがともに余暇を過ごすことが次第に当たり前になった。後述するとおり、結婚後に女性たちが「自由」な時間を夫と主に過ごすことを当然とするようになるが、それもこのような経験を背景としていた。男女がともに過ごす余暇の場として特に人気があったのはダンスホールと映画館であった。また若い人々にとって、同じ職場の人間とつきあうことは必ずしも良いことではなかったから、ダンスホールは異性と知り合う場でもあった⁽³⁴⁾。

働く若い未婚の女性たちのこうした行動は、金銭面だけからでも多くの制約を免れるものではなかったが、それでも、親の厳しい監督の下にある結婚前の女性という因習的な女性像と矛盾するものであり、そこに女性たちの自立への志向性が現われていたし、収入の大半を親に渡したり、家事を手伝うことに象徴されるような「他者のため」の生活ではなく、「自分のため」の生活をつくろうとする欲求が潜んでいたことはすでに指摘されている。労働者階級の未婚の女性たちは、帰宅後に父親や兄の世話をさせられたが、彼女たちは「仕事が終わった後の、この他ならぬ家事の義務を果たすこと嫌さに、家の外にいて、友達と一緒にとにかく映画でも何でも可能なことで気晴らしをする」のである⁽³⁵⁾。実際、性差役割分業の下で女性に対して「他者のため」に時間を使うことが求められているのだとすれば、「自分のため」に時間を使うことを目的としたいかなる行動といえども——例えば、余暇を過ごした

めに提供されている様々な手段の中から、何か一つを選択するという最低限の行為ですら——女性の自立化のための一歩ということになるだろう。「自分の時間を使えるということは、客観的にはささやかであるにしても、それでも人生の中では重要であるような、日常の中の小さな自由を創り出す。その自由は自己の創意と独立性とを発展させるような自由なのである。」⁽³⁶⁾ 更に、若い未婚の女性が働くことによって「自分の金」を手にすることは、ダンスホールの場合が典型的であるように、余暇の機会を利用して家庭及び職場とは異なる人間関係を形成する前提でもあったのである。そうである限り、たとえ僅かではあっても、「自分の金」で余暇を過ごすようになるということは、化粧をすることと同じく、人生の中で一つの段階、親の家庭から離れる段階に到達したということを意味している。つまり、若い女性にとってその独立性あるいは自立性は、働く場での対象との関わりや、対象を媒介とした同僚との関係から形成されてくるのではなく、働いた後にどれだけ自分のための時間、自分のための金が残るか、というところから形成されてくるのである⁽³⁷⁾。若い未婚の女性職員層の出現に象徴されるような女性労働の変化とは、このように就労が「他者のため」ではなく、「自分のため」へとその方向を変えていくことを意味していた。

〔3〕 ヴァイマル時代の労働者や職員にとって最大の娯楽の一つは映画であった。言うまでもなく、それは仕事によって生じた緊張をときほぐす手段として好まれたのである。1920年代に映画が「見込みのある」産業であったことは、1920年には全国で約3700館であった映画館数が29年には5000館以上になったことに見て取ることができる。この間に映画の制作本数は1922年の646本から29年の175本へと大幅に減少したが、それは作品の長編化によるところが大きであった⁽³⁸⁾。だが映画が人気産業であり、作品の長編化が進んだということは、必ずしも映画の「文化」的な水準が向上したとい

うことを意味するのではない。例えば、20年代半ばに制作された映画の25～30%は18歳未満の人間の鑑賞が禁止されたボルノ映画であった、といわれる⁽³⁹⁾。こうした状況に対して、それが19世紀以来の市民文化に対する挑戦であり、文化的、教養的映画の制作と上映を推し進めることが文化を守るために必要であるという主張⁽⁴⁰⁾や、社会の現実とその変革可能性を明らかにするような映画が必要であるというような主張⁽⁴¹⁾も展開されたが、それらはいずれも大きな支持を得ることがなかった。特に後者については、SPDやKPDからも支持されなかった⁽⁴²⁾。

フランクフルト社会調査研究所の調査によれば、労働者や職員の間での映画や演劇に対する関心は若い層ほど高く、また労働者は演劇よりも映画を好む傾向が強かった。とはいえ、それは職員層が映画を見なかったことを意味するのではない。職員がどちらかといえば演劇を好むというのは、むしろ映画は芸術ではないという中産階級の間には広がっていた偏見を職員層が共有し、映画についての態度を隠そうとしたことから生じた調査結果にすぎない⁽⁴³⁾。実際、職員層の中でも若い女性たちにとって、映画は大きな楽しみの一つであった。ブレスラウの出身で第1次大戦末期からベルリンに暮らしていた、あるお針子兼会計係は次のように述べている。

「芝居よりも映画によく行きました。このころ映画は雨後の竹の子のように次々と作られていたのです。私はよく友達と一緒に映画に行きました。が、しばしば一人でも行きました。誰にも邪魔されなくなかったからです。……私はハンス・アルバースを特によく覚えています。……ハンス・アルバースは本当によい俳優でした。……1925/26年になって、映画はまたもやものすごく流行り始めました。そのころトーキーが現れたのです。……私たちは映画から多くのことを学ぶことができました。私は、人がどのようにして何かを手に入れたのかを見るのが好きでした。しかし大抵の場合、

人は何も手に入れることができませんでした。手職からでは人は100万長者にはれないのです。……ところが沢山の映画がありました。』⁽⁴⁴⁾

映画は明らかに満たされない現実を代替するものとして存在していた。小さな商店の若い女性店員が映画に行けば、彼女は夢の世界に入ることができたのである。

とはいえ、どのような映画でも彼女たちの関心を引いたというわけではない。映画が、仮に彼女たちの厳しい現実を描いたものであれば、それは彼女たちの関心を呼ぶことはなく、かえって現実とかけ離れた生活を描き出す、非社会的なメロドラマ的な映画や、リリアン・ハーヴェイの歌のように「この世のどこかにささやかな幸せがある」ということをほのめかす映画こそが、彼女たちの関心を引き、仲間内での話題となったのである⁽⁴⁵⁾。もちろん現実の若い女性は、僅かばかりの余暇を乏しい経済力の中で楽しもうとするような存在であり、社会的行動においても、性的行動においても、第1次大戦前には見ることでできなかったような、自立性を持った「新しい女性」などではなかった。彼女たちは、若い女性店員についてクラカウアーが述べたこと、つまり現実が厳しく単調であればあるほど、「自由」な時間にはせめて現実から離れたものに喜びを見いだそうとしていたにすぎない⁽⁴⁶⁾。そしてこの現象は、都市で就労する若い女性の多くに当てはまったのである。従って、20年代半ばに次々と制作され、大都市の現実を描き出した多くの「街頭映画」は、しばしば優れた大作品ではあったが、平均的な映画ファンである若い女性の工員や職員たちにとっては、あまりにも彼らの日常生活そのもの、転変していく大都市にあって、最早見通すこともできなければ、コントロールすることもできないような一つの過程の中にある自分の人生を思い起こさせるのであった。急速に進展する合理化の中で、また20年代末ともなれば恐慌の中で、絶えず失業の危機に脅かされているか、就労するにしても仕事は単

調であり、仕事を通じて何事かを成し遂げたり、別の何者かへと変わる見込みがないからこそ、仕事の後の「自由」な時間は彼女たちにとって楽しみ
の時間なのであり、「自分のため」の生活の時間なのであった。その意味で
それは彼女たちにとって真正な時間であった⁽⁴⁷⁾。現在と将来の不安定さ、見
通しのなさこそが、今の余暇を唯一の確実な時間として存在させることになっ
たのである。そうした時間には、彼女たちをしばしば打ちのめす現実よりも、
現実を忘れさせ、「夢」の世界へと誘う映画、「自分たち」のような「普通の
人々」のもつ——ありもしない大富豪との結婚から「ささやかな幸せ」まで
の——「夢」を感じさせる映画が好まれるのは当然であった⁽⁴⁸⁾。20年代末
から30年代にかけてオペレッタ映画が人気を呼んだのもこのことに関連し
ていた。仮に「黄金の20年代」ということが、20年代半ばについて言い得
るとすれば、それはこの時期だけが若い人々にとって、ここに述べたような
意味での余暇を過ごすことが可能であったからに他ならない。

以上のように、働く若い女性たちにとって映画は彼女たちを「夢」の世界
へと誘う魔法の光であったが、映画の意味をこのことだけに限定することは
誤りであろう。すなわち、自立した「自分のため」の生活を望みながらも、
それができない女性たちが、決してメロドラマの主人公とは言えない『嘆き
の天使』に共感を寄せるとき、彼女たちは制度的には保証された女性の社会
的な地位が現実には実現していない状況、「他人のため」の生活をおくらざ
るを得ない状況に対する怒りを、そこにおいて燃焼させているのである⁽⁴⁹⁾。
あるいはまた、映画に登場する「新しい女性」の中に自分たちの気持ちを読
み込んでいたのである。例えば、「新しい女性」を具象化したルイーゼ・ブ
ルックス主演の映画を見るとき、「新しい女性」ブルックスが体現していた
のは、女性たちが日常的に感じている家父長的、抑圧的な権威に対する性を
武器とした反逆であったのである⁽⁵⁰⁾。

このように映画は、就労を通じて自立への可能性をつかんだ女性たちの

「夢」を表現するものであった。それは一方では、彼女たちの小さな自立を可能にしたものが収入を得ることであったならば、都市の提供する様々な財と機会を今以上に利用できるようになることという「夢」であった。だが他方では、それは彼女たちを未だ「他者のため」に存在せしめるような社会の抑圧的、権威的な構造への反逆の「夢」でもあったのである。就労を通じて若い未婚の女性たちが得た自立性の内容はこのような性質のものであった。

〔4〕余暇への関わりの中で、若い女性が「他者のため」の生活を強制する圧力への反逆の気持ちを燃焼させたのは、映画の場合だけではなかった。ヴァイマル時代にその発展のピークに達した労働者文化運動、とりわけ労働者スポーツ運動の場合も同様であった。観戦も含めたスポーツ熱の高揚の中で、ヴァイマル時代の労働者スポーツ運動は最盛期にはメンバーのおよそ20%が女性であり、その大多数は若い未婚女性であった⁽⁵¹⁾。労働者階級やそれに近い下層中間層に属し、しばしばその劣悪な住環境からしてもスポーツや身体を動かすための十分な場所がなく、また仕事以外の時間には家事を手伝うことが期待されているような若い女性たちにとって、スポーツ運動への参加には色々な意味があった⁽⁵²⁾。

第1に、それは家事手伝いを期待する親の歓迎せざる行為であった⁽⁵³⁾。だが既に述べたように、家庭外で就労している娘たちに、週末までも家事を行わせることは難しかったのである。

親が娘のスポーツ運動への参加を好まなかったのは、それがまた親の目の届かないところで行われる行為でもあったからである。だが、まさにそうであるからこそ、若い女性たちは「自分のため」の生活の一部として労働者スポーツ運動に参加することを好んだ。労働者文化運動一般と同じく、労働者スポーツ運動も、特定の競技や体操を行うという運動本来の目的だけではなく、様々な行事がその活動の重要な柱をなしていた。例えば、イースターや

聖霊降臨祭の休みには既婚、未婚の独身男女が泊まり掛けの徒歩旅行を行うことが稀ではなかったし、また夏、特に若い女性に人気のあった水泳ないし水浴びをする時、男女が裸のままであることも少なくなかった⁽⁵⁴⁾。あるいは練習の後にクラブハウスか居酒屋でくつろいだりする事もあった。このような行動は狭い劣悪な住環境からの解放であるばかりではなく、「他者のため」の生活を求める親や社会的圧力からの解放でもあれば、平日の労働のなかで強いられた緊張からの精神的な解放でもあった。こうした色々な意味での解放が、労働者スポーツ運動への参加の持つ第2の意味であった。

ここに述べたような行動への参加は必ずしも経済的に大きな負担となることはなく、仮に失業していても、僅かばかりの金額ならば仲間が負担するのが常であった⁽⁵⁵⁾。労働者文化運動の中には自由思想運動のように互助会的機能を持つ運動もあったが、そうでなくともメンバーの相互扶助的機能は重要であり、労働者スポーツ運動における失業者への配慮もそうした機能に近いものがあった。こうしたことから分かるように、労働者スポーツ運動は一種の社交と保障の場なのであり、人々はこの中で安心とくつろぎを覚えることができたのである⁽⁵⁶⁾。このことは女性にとっても同じことであった。従って、スポーツ運動への参加は女性にとって、第3に、コミュニケーションの場への参加であった。上に述べたような様々な機会を通じて、若い女性たちは——そして男性たちも——異性と結びつくことができたのである。それだけではなく、スポーツ運動への参加を通じて人々と色々な形で交流しうるということは、男性に比べて緊張緩和の機会と手段に乏しい女性にとって特に重要であった⁽⁵⁷⁾。

以上のような、労働者スポーツ運動への参加に含まれる意味については、他の労働者文化運動の場合でも同じように言いうることであった。そうであるならば、若い女性たちにとって、労働者文化運動は余暇を過ごすための機会や手段という意味では、商業的な余暇の手段と異なるものではない。だが、

労働者スポーツ運動も含めて、労働者文化運動には商業的な余暇の機会と大きく異なる点があった。一般に労働者文化運動は政治的な労働運動の一部であり、労働者スポーツ運動の場合も例外ではない。確かに、スポーツ運動の参加者にとって、余暇を満足のいく形で満たすことが重要なのであって、政治問題、まして政党間の争いの問題はほとんど関心外であった。しかし、仮に直接的に労働者政党のメンバーであることが求められることはないにしても、メンバーが労働者階級の一員であることを自覚すること、そのような人間として行動することは労働者文化運動の場合には自明のことであった。更に労働者スポーツ運動が、個人性、個人としての記録の向上を追求する、従って、その競技性あるいは闘う性格を強調するブルジョワ的スポーツクラブとの違いを集団性に求めたことに現れているように⁽⁵⁸⁾、労働者をブルジョワ階級と明確に区別しようとする志向性が労働者文化運動には顕著であった。このような性格を持つが故に、労働者文化運動に関わることを拒否するもの、関心を持たないものなど様々な人間がいた。また職員層はしばしばこうした労働者文化運動を労働者の運動、自分たちと関わりのない運動とみなしていた。労働者文化運動のもつこうした志向性を煩わしく感じる人々は、ダンスや映画などの商業的な余暇の機会を利用し、ブルジョワ・スポーツクラブに参加したり、スポーツ観戦を行ったのである⁽⁵⁹⁾。

このように見てくれば明らかなとおり、労働者文化運動の発展は労働者固有の運動としての性格を希薄化するにつれて、参加者のための余暇の機会の提供という以上の意味を持たなくなり、その点で商業的な余暇の機会との間の垣根は低くなるのである。勿論、労働者文化運動には上に述べたように労働者の相互保障というような側面もあり、決して労働者に固有の性格を失うものではないが、そのような必要性が例えば公的な制度によって埋められるようになれば、労働者にとって労働者文化運動は、ただの文化運動となるであろう。ここにおいて、労働者文化運動の持つ集団性の強調などは、「自分

のため」の余暇を求める人々、特に「他者のため」に存在することを求める圧力に曝されている若い女性にとってはかえって煩わしいものともなるであろう。こうして、ヴァイマル時代の労働者文化運動の発展は、その内実において、「自分のため」の余暇、「自分のため」の時間を求める若い女性たちの志向性と矛盾するものを含んでいたのである。換言すれば、労働者文化運動は「自分のため」の時間を必要とする若い女性たちの日常生活に対しては、その有効性の面で限界があったということである。まさにそれは週末だけの、しかも場合によっては特定の週末あるいは休暇期間だけの余暇の手段なのであり、他の曜日には余暇のための別の手段が利用されることになった。若い未婚の就労女性にとって、経済力が許すならば、その代替手段とは容易に利用可能な商業的な余暇の手段であったのである。

3. 主婦の時間

〔1〕 労働外の時間が延長されることを積極的に評価する傾向は男女を問わず広く見られたが、既婚女性の大半を占める専業主婦の場合も、このことは家事時間の短縮によって自分の「自由」になる時間が延長されるという風に意識された。就労女性の「夢」がしばしば専業主婦となることにあったのも、そうならば「自由」な時間が持てるということがその理由であった⁽⁶⁰⁾。自分の「自由」になる時間の拡大が最も困難であった社会層の一つが既婚の女性労働者であったが、彼女たちにとっても、実際に余暇があるかどうかはともかくとしても、余暇は当然あって然るべきと感じられていた。

「私には自由な時間は本当に僅かしかありませんが、それでも日曜と土曜の午後というものはいつでもとても楽しみなものです。……以前に半ドンもなかったような長い労働時間の時は、一体どんな状態だったのだろう

かと、私はよく考えます。』⁽⁶¹⁾

このように働く既婚の女性にとっても週末は楽しみな時間であり得たが、それにしても二重負担に苦しむ既婚就労女性の余暇の問題については、余暇がいかに過ごされたかという余暇の内容よりもまず、いかにして余暇が作り出されたのかが問われねばならない。

女性に限らず労働者の場合、いうまでもなく、職場での労働時間の短縮は個人のなせるところではないから、「自由」な時間、すなわち余暇を拡大するための既婚就労女性の努力は再生産活動の領域、つまり家庭生活の場へと集中された。このことは具体的には、既婚女性労働者の圧倒的多数が帰宅後に行わねばならなかった家事を合理化する形でなされた。とりわけ1918年以降は土曜の就業は昼までであったから、週末にどれだけ「自由」な時間を作れるかは働く女性にとり極めて重要な問題であった。「少しでも自由な時間を作るためには、どのようにしたら仕事を早く片付けることができるかをいつも考え」⁽⁶²⁾、家事の時間を節約するための工夫がなされた。買い物はまとめ買いをし、夕食は冷食を中心とし、日曜の食事はすべて前もって作り、掃除は毎日少しづつ部分的におこない、さらに可能ならば、家事を他の家族員に分担させた⁽⁶³⁾。このようにして週末の時間を空ける工夫がなされたのである。こうした考え方と行動は日本でも、たとえば羽仁もと子などにより1920年代から30年代にかけて唱えられた家事の合理化と共通するものがあったが、羽仁の場合、その対象としたのは都市の新中間層に属する女性であった⁽⁶⁴⁾。

注目すべきは、このような時間を節約する習慣を勤労女性が労働過程の中から得てきたことである⁽⁶⁵⁾。いうまでもないことながら、労働時間は家事のための時間とは全く別の時間である。幾分比喩的な表現を用いるならば、女性は就労することで初めて「自分の時間」というものを持つことができたの

である。家事の負担が基本的に女性一人にかかっている限り、家族の絶え間ない要求に女性は応えなければならないか、あるいは少なくともその用意をしていなければならない。そこには一体に、時間の計画的な利用、「自分のための時間」を作り出す余地はなかった。これに対して、就労時間はその内部に一定のリズム、合理的な時間配分を持つばかりか、全体としては私的な時間とは区別された時間である。言い換えれば、私的な時間は就労時間とは区別されるのである。この仕事の後の、仕事のない、私的な時間をいかに過ごすか、という余暇の問題がここに浮上してくる。労働過程の合理化が急速に進められた1920年代に余暇の問題が登場したのは偶然ではない。急速に進展する労働過程の合理化は、労働過程で強い緊張から精神と肉体を解放するために、男女を問わず、仕事の後に「自由」な時間を過ごすことを必要とさせたが、今、この「自由」な時間が緊張した精神と肉体を回復させるということ以上に、「自分の時間」と意識され、それを過ごすために準備する時間の使い方が、労働過程の合理化と同じ観念で支配されるようになったのである。そればかりではなく、「自由」な時間の使い方それ自体も合理化されていく。ここに労働過程の合理化が労働者の生活全般を覆う原理となっていることが窺えるであろう。

注目すべきもう一つの問題は、再生産領域でのこうした「自由」な時間を作るための努力が、基本的には、女性たちの個人的努力によって果たされたことである。すでに今世紀の初め、リリー・ブラウンは女性を2重負担から解放するために家事を共同化する必要を唱えていたが⁽⁶⁶⁾、1920年代に労働運動の中で、特にストライキに際してしばしば、それは実行に移されていた。だが20年代に、働く既婚女性たちが余暇との関係で「自由」な時間を作ろうとしたとき、共同の給食や共同保育というような集団的な努力によって家事を合理化し、「自由」な時間を作ることはほとんど問題にならなかったのである⁽⁶⁷⁾。ここには家族が社会の基本的な単位となっている事実と、その家

族の中では女性が再生産領域での活動を中心的に担っているという事実が反映していると言えよう。

ところで、いうまでもないことながら、家事の合理化は単に時間の節約、時間配分の合理化によってのみなされるのではない。家事を合理化するための様々な生活機器を購入することも必要であった。中でも週末の主婦の仕事を軽減する上で最も必要とされたのは洗濯機であった。とはいえ洗濯機は新型共同住宅の地下に共用のそれがあればよい方であった。洗濯機以外では電気アイロンもまた必要とされた。調理のためにはガスレンジもしくは電気オーブンが求められた。これらの機器は比較的普及していたとはいえ、労働者の場合は、大都市の上層の労働者にしか手に入れられなかったし、それも月賦によってであった。それゆえ、現実に比較的多くの労働者家庭にも普及したのはせいぜい圧力ガマであった。家事の合理化のこの側面、つまりそれが家庭用品を生産する産業によって支えられていることに着目するならば、家事の合理化とはそれらの製品を購入することができ、且つ第1次世界大戦後の家事使用人の急激な減少によって家事に関わることを余儀なくされつつあった中産階級の運動なのであり、労働者家庭の運動ではない。だがそれにも拘わらず、20年代にこのような家事の合理化は労働者家庭にも浸透し始め、生活機器の購入だけではなく、それを利用することのできるような新型住宅への入居も含めて、少なくとも一部の労働者世帯の目標となっていた⁽⁶⁸⁾。このことは労働者階級と他の階層との生活様式の接近を表現していたのである。

余暇を生み出すための時間の節約は、以上のような機器の購入によってなされただけではなく、食料品については調理済み食品の購入によってもなされたし、かつては自家生産された多くのもの、例えばザウアークラウトやピクルス、ジャム、あるいはハム類などが今や食料品店で購入されるようになった。

このように家事の合理化は消費生活の拡大とセットになっていた。この事

から逆説的にも、家事の合理化はその反面に支出の増大を伴ったばかりか、購入された機器その他の商品にあわせた生活形態をとることを必要とするようになり、それはしばしばかつてと同様に多くの時間を女性から奪ったのである⁽⁶⁹⁾。例えば、様々な食料品の購入が当たり前となれば、女性は商店の閉店時間に自分の行動時間を合わせる必要がでてくるばかりか、職場からの帰宅経路をそれに合わせることになる。また日曜日が夫や子どもと過ごす「自由」な時間となり、親族や友人を招いたり、あるいは訪問し、特別な食事をし、普段口にしない菓子や酒、タバコ等をその機会に食する習慣が広がるにつれて⁽⁷⁰⁾、平日はそのための準備の時間としての性格を持つようになる。そうした「特別な」商品の購入は、その家庭の収入の範囲内であったにせよ、特に時間をかけて入念になされたからである。要するに、一週間の時間全体が週末の余暇に向けて、その使い方が定められていくのである。

〔2〕 家事に費やされる女性の時間を節約するためには家事を家族で分担することが有効であり、また必要でもあった。その際、子供特に未婚の娘が母親を手伝う労働力として最も期待され、事実彼女達は家事を分担したが、妻の側からはしばしば夫が家事に参加することも期待された。もちろん、女性の解放を旗印とする労働運動の活動家のあいだですら、仕事の後には家事と育児に忙殺されている「妻には時間が無い」ということを理由に、女性が労働組合や政党の活動に参加する事を拒む空気が濃厚であったほどであり、夫の家事への参加がすでにヴァイマル時代に広がっていたということとはできない。だがそれにもかかわらず、1920年代には労働者階級の女性のあいだにも男性の家事への参加を求める空気、少なくとも男性が手をこまねいていることを許容しようとはしない空気が広がっていた。例えば、繊維産業で働く女子工員（既婚、32歳）は、夫が望もうと望むまいと家事を手伝うのは当たり前であると述べているし⁽⁷¹⁾、一体に、比較的若い女性ほど父、夫、

兄弟など、総じて男性が家事を行わないことに批判的な眼を向けていた⁽⁷²⁾。そうした批判的な眼差しは、夫が労働運動に関わったとき、特に強くなったようである。27歳のある女子労働者は、「夫たちは妻を伴侶としてではなく、女中としてみている。……多くの男性たちは組合員証や党員証をポケットに入れただけで事足れりとしているのです。しかし真の労働組合員というものは、まず自分の家庭のなかで社会的関係をきちんとすべきものなのです。彼は自分の妻が自分と同権であることを認めなければなりません」として、さらに夫が家事を分担し、妻がそれによって二重負担から解放されて初めて、妻にも「より多くの余暇が生まれる」と述べている⁽⁷³⁾。ここには建て前として女性解放を掲げながら、現実には性差役割分業を基礎とした男性による女性支配に完全に乘ってしまっている、労働運動に対する痛烈な批判がある⁽⁷⁴⁾。女性が男性ほど多く労働運動に関わろうとしなかったことは決して故なしではない。それは彼女たちの生活実感を背景としていたのである。

このような、男性にも家事への参加を求める気持ちの強まりは、一般的には就労による女性の自立性の高まりを背景としていたが、そもそも女性の就労自体が、労働者家庭の場合、特別な意味あいを有していた事にも関係している。一般に男性労働者は妻が家庭外で働くことを好まなかったし⁽⁷⁵⁾、女性も男性の6~7割という低賃金と、劣悪な労働条件の下で働くことを望まなかった。それをあえて家庭外で就労するのは、夫の収入の絶対的な不足を補うためか、そうでない場合には、しばしば物質的により良い生活、とりわけよりよい住環境を求めてのことであった⁽⁷⁶⁾。要するに、働くべき積極的な根拠があるのである。ここで言う物質的に豊かな生活が家事の合理化、つまり家事にかかる時間の節約を可能にする機器、耐久消費財を持つことである限りは、それは余暇に関連していたし、また豊かな生活とは、場合によっては、商業的に与えられる様々な手段を媒介に余暇をより豊かに過ごせるようにすることでもあるのはいうまでもない。つまり消費と就労とは相関しているの

である。我々はすでに、若い女性が就労を通じてその自立性を獲得していくとき、その自立性の一端は僅かばかりの金を費消する可能性にかかっていたことを見てきたが、主婦の場合も基本的にそれと異なるものではなく、ここに世代の如何を問わず、消費が余暇との関連で意味を持つようになってきていることが窺えるのである。

このような就労と余暇と消費のトリアードがまた女性の男性に対する姿勢を、潜在的にせよ変えつつあったのであり、男性に家事への参加を求める気持ちの強まりも、その現れであった。しかも、女性が自由な時間を、例えば買い物、映画、ダンス等、商業的に与えられた余暇活動の機会を利用したり、あるいは郊外への行楽などで夫とすごそうとし、夫もまたそれを望む場合、夫に対する家事参加の要求は強まらざるをえないのである。つまり、単に女性が家庭外で就労しているということによってではなく、その就労行動によって作りだされた余暇の存在が、男女間の性差に基づく位置関係を変えていく可能性を含んでいたのである。実際、女性が家庭外で働いているかどうか、その労働時間が長いかどうかということは、それ自体としては、男女間の性差による位置関係に関係がなかったのである⁽⁷⁾。

〔3〕 既婚就労女性の余暇は大体において家族中心に過ごされた。労働者家庭における余暇、特に週末の過ごし方として、最も手軽で人気があったのは郊外へ出かけること、すなわち家庭菜園で時間を過ごしたり、ハイキングを行うことであった。このことは労働者の家庭にとって手頃な余暇の手段が都市にはないことの表れでもあった。労働者家庭の余暇が家族中心に過ごされるものである限り、それは余暇を過ごす場所の面からしても、独身者の余暇の過ごし方とは異なっていたのである。なお、ハイキングの途中あるいは目的地に着いてから飲食店で食事をするというようなことは、普通の労働者の家庭では難しかった。仮にそうした食事までするという事になれば、

「ハイキングでさえも高すぎる」というのが実状であり⁽⁷⁸⁾、従ってハイキングには弁当やお茶を持参するのが普通であった⁽⁷⁹⁾。

また春先から秋口までの週末には、都市の労働者家庭では家庭菜園で時間を過ごすことが珍しくはなかった。特にプレーメン、キール、ハノーファーなどでは、労働者に仕事の後、屋外で精神と肉体の健康を取り戻させる目的で、家庭菜園の建設が公的に支援されてきた。「家庭菜園では家族が自由でのびのびとしていると感じる事ができ、それが自分の家であるという感情を持つこと」が期待されたのである⁽⁸⁰⁾。事実、行政側のこうした期待は満たされた。労働者とその家族にとって、日曜日に家庭菜園に出かけることは大きな楽しみの一つであった。家庭菜園でどのように時間を過ごすか、どのような作業を行うかを、女性と子どもたちは何日も考えるのである。楽しみの中には家庭菜園での他者との交流も含まれていた。それは菜園コロニー内部での交流であった。ここには、従来は労働者の間で一般的であったような、職場の同僚や近隣の人々との間で行われるのとは異なる交流のありようが窺える。

総じて、これまで見てきた週末における時間の使い方は、家族とともに過ごすものでありながら、そしてその際しばしば女性は「家事」を行わねばならなかったにも拘わらず⁽⁸¹⁾、労働運動にも煩わされないで済む「自分のため」の、あるいは純粹に「自由」な時間と意識されていた。繊維産業で働くある女性労働者は、週末に行われる組合主催の婦人集会に参加する女性が非常に僅かしかいないと嘆いているが⁽⁸²⁾、そのような状態も既婚女性就労者の余暇についての気持ちによるものであろう。こうした意識は労働運動の活動家の間でさえ見ることができたのであり⁽⁸³⁾、余暇を私的な「自由」な時間と意識し、それを労働運動とその文化から切り離す傾向の現れといえるだろう。だが、このことは直ちに、労働者家庭が商業的な形で提供される余暇の手段を享受したということでもなければ、労働者文化に関わりを持たなかったとい

うことを意味するものでもない。ハイキングや家庭菜園に出かけること以外の、様々な形で商業的に提供される余暇の手段つまりダンスホール、劇場、コンサート、レストラン等々は、「ハイキングですら高すぎる」労働者家庭にとっては、それらに対する欲求と、そのための時間はあっても、現実にはなかなか手の届かないものであった。こうして多くの労働者家庭にとっては映画や、ウィンドウショッピングが商業的な形で与えられる余暇の手段として、手にすることができる数少ない手段であった。逆に、商業的な形では手にすることができなかった余暇の手段を労働運動の側から提供するとき、個々の労働者にとっては労働者文化運動もまた、商業的な場合と同じく、余暇を過ごすための手段としての意味を持つのである。ヴァイマル時代に労働者文化運動が発展するのも、労働者にとって余暇が拡大したにも拘わらず、それに対応する手段が労働者家庭に欠けていたことを背景としていたのである。労働者にとって与えられた何れの手段を選択するかということは——経済的な事情を別とすれば——選択された活動の種類によって決まるのではなく、選択するという行為に伴う他の事柄に選択者がいかなる意味を付与するにかかっているのである。そして、こうして手にすることが可能になった余暇の手段を、夫婦あるいは家族全体で利用することが次第に家族のあるべき姿として骨格をなしてきたのが、この時代であった⁽⁸⁴⁾。

4. 「自由な時間」から組織化された余暇へ

〔1〕 本稿では就労女性にとっての余暇を、家事を含む仕事の後の、労働力を再生産するための休息時間を除いた、「自由」な時間と捉えてきた。それは若い未婚女性の場合は特に顕著に「自分のため」の時間と理解され、そのような時間として用いられた。就労している既婚女性の場合も、余暇は「自分のため」の「自由」な時間であり得たが、例えば数週間に一度は必ず

「大きな洗濯の日」として週末が使われてしまうことに典型的に現れていたように、家事が女性の時間から個人的性格を奪ってしまう可能性が常に存在していた。その結果、既婚女性にとっては精々のところ計画的時間配分、生活機器の利用、家事の分担などによって節約された時間を余暇としていかに有効に利用するか、という形でしか余暇は存在しなかった。そして既婚女性たちはしばしばそうした時間を家族とともに使うことで「自分の時間」としていた。仮に本当に「自分のため」に時間を使いたい時でも、大概の場合、例えば、一緒に散歩に行こうという夫の要求を「拒むことはできなかった。何故なら、そんなことをすれば夫が自分を非難するであろうから」である⁽⁸⁵⁾。ここには、「自由」な時間が「自分の時間」となるかどうかは、自分自身と夫及び家族が女性の「自由な時間」をどのように考えるかにかかっていることが現れている。こうして既婚女性が余暇を「自分のため」に利用できる可能性は極めて制限されるばかりか、「自分の時間」を家族とともに使う場合も、二重負担の故に、言い換えれば、その時間が節約によってようやく作り出された時間であったが故に、余暇の手段を選択する可能性が著しく制限されることになった。

以上のことから明らかなとおり、労働者階級の既婚女性にとって余暇の拡大は、二重負担からの解放にかかっていたのである。だが、女性が家事を負担するということが自明視されている限りは、そしてまた家事の社会化が問題外である以上、二重負担からの解放は女性を就労活動から「解放」する以外に道はない。こうして、「共稼ぎ反対」キャンペーンからナチズムによる女性就労の制限に至るまで、勤労女性をその負担から「解放」するキャンペーンは常に一定の反響を女性の間で持つことになったのである。だが、就労から「解放」されて専業主婦化した女性にとって、たとえ家事以外の時間が「自分の時間」と感じられようと、その時間に女性がなうことは決して多くはない。何故なら、既婚就労女性は二重負担故に、夫や家族に対して

家事の分担を求め、「自分の時間」を持つ権利を主張し得たのであり、逆に就労の機会を失った女性は最早そうした権利を主張し得ないのである。従って、「自由な時間」に行うべきことを家族に対して要求することもできない。まさに、夫の要求を拒むことはできないという先の引用にもあるとおり、夫の選択した余暇の手段に自らも従わざるを得ないのである。現実には余暇の手段は二重負担から「解放」された後も、それ以前も基本的に変えることはないのである。余暇の手段が与えられている場合には、「自由な時間」があるだけそれを利用できる可能性も広がるが、どのような手段を選択するかについて最早積極的に発言すべき根拠がそこには欠けてしまうのである。こうして、余暇活動は選択行為を伴う主体的な営みであることを止めるのである。ここからナチズム的な組織された余暇活動までの距離は遠いものではない。

〔2〕 若い独身女性にとっては、余暇が「自分のため」の時間であるということは既婚女性の場合よりもはるかに明確であった。余暇は「自分の時間」として、その自立性を確認する手だてとなったのである。その際、余暇をいかなる手段を用いて過ごすかはさし当たり重要ではなかった。若い女性たちは、余暇の場を通じて、職場や家庭とは異なる人間関係を作ること、あるいはそのことも含めて、「他者のため」の生活を強制する圧力からの解放を求めたのである。ところで、労働時間や収入について述べたところからも明らかなおとおり、若い女性たちにとっても余暇のための機会とその手段は限定されていた。時間に乏しい若い人々にとって、余暇を通じて他者との交流をはかろうとするならば、ダンスや映画のような比較的安価な手段に頼り、逆に比較的時間にゆとりがある場合には、それを満たすだけの金銭的な不足をカバーするために、ハイキングのような手段がとられた。こうして若い未婚女性の余暇は直接、間接に商業的な余暇と結びついていたのである。そして、

ハイキングなどが労働者文化運動やあるいは社会主義的青年運動によって提供されるとき、それを享受する側にとってはそれらの運動は単なる余暇の手段なのであり、その固有の「政治的」性格は二次的な意味しか持たなかったのである。それどころか、余暇の中で他者との交流を通じて「自分のため」の時間を過ごすことで「自分の生活」を作ろうとする若い未婚女性にとって、そうした「政治的」な性格は邪魔でさえあった。既に述べたように、労働者文化運動の持つ政治的な性格が労働者階級に固有の文化を表現するものであるとすれば、若い未婚女性の間での余暇文化の広がりや、それを解体する方向に作用するものであった。とはいえ、このことの根底にある「自分のため」の生活を求める女性の願望は、未だ余暇の中でしかその内実を現してこなかったし、また余暇の中での他者との交流も労働者文化運動に替わる新たな社会関係を展望させるものではなかった。その意味では、若い女性の自立化傾向の行き着く先は不分明であり、余暇の手段が大規模に組織的に提供されるならば、その中に吸収されていく可能性も存在していたのである。

註

- (1) 労働者文化に関するこのような理解の仕方は、G. A. Ritter, "Einleitung", in: ders. (Hg.), *Arbeiterkultur*, Königstein 1979, S. 1-14: これに対する批判的な見解として、D. Kramer, *Theorien zur historischen Arbeiterkultur*, Marburg 1987.
- (2) Vgl., A. v. Saldern, D. Mühlberg, "Kontinuität und Wandel der Arbeiterkultur", in: *Mitteilungen aus der kulturwissenschaftlichen Forschung* (=MKF), Nr. 30, 1992, S. 226; D. Mühlberg, "Modernisierungstendenzen in der proletarischen Lebensweise", in: ebd., S. 34ff.; H. A. Winkler, *Der Schein der Normalität. Arbeiter und Arbeiterbewegung in der Weimarer Republik 1924 bis 1930*, Berlin/Bonn 1985, S. 120ff.; J. Mooser, *Arbeiterleben in Deutschland 1900-1970*, Fr. a. M. 1984, S. 224 特に, S. 228. なお、労働者階級の「ブルジョワ化」という観念が、ヴァイマル時代に特に論議されたのも、本稿で取り上げる2つの文化形態の競合関係に関連していた。
- (3) Vgl., A. v. Saldern, "Massenfreizeitkultur im Visier", in: *Archiv für*

Sozialgeschichte 33, 1993, S. 23ff.; dies., "Neue Bedürfnisse veränderter Menschen. Massenfreizeitkultur und Geschichtsschreibung", in: *MKF* 37, 1996, S. 271; G. Irmischer, "Zur Arbeiterfreizeit um 1930. Zwischen Ideologie und Empirie", in: *MKF* 37, S. 264. W. ラカー『ワイマル文化を生きた人びと』脇圭平, 八田恭昌, 初宿正典訳, ミネルヴァ書房 1980, P. 95 以降; D. ポイケルト『ワイマル共和国。古典的近代の危機』小野清美, 田村栄子, 原田一美訳, 名古屋大学出版会 1993, p. 151 以降。

- (4) A. Saldern, D. Muhlberg, a. a. O., S. 227.
- (5) さし当たり, この問題についての研究史的な整理として以下の論文を参照。
K. Canning, "Gender and the Politics of Class Formation: Rethinking German Labor History", *American Historical Review* 97, No. 3, 6. 1992, p. 736ff.; M. Cattaruzza, "Arbeiterkultur, Arbeiterbewegungskultur, Männliche Kultur", in: *Neue Politische Literatur* XXXIV/2 (1989), S. 256ff. また, 労働者文化運動を直接の主題とするものではないが, 政治史研究の方向を示すものとして示唆に富む, E. Rosenhaft, "Women, Gender, and the Limits of Political History in the Age of >Mass< Politics", in: L. E. Jones, J. Retallack (eds.), *Elections, Mass Politics, & Social Change in Modern Germany*, Washington, D. C. 1992, p. 149ff.
- (6) D. Langewiesche, "Arbeiterkultur. Kultur der Arbeiterbewegung im Kaiserreich und in der Weimarer Republik. Bemerkungen zum Forschungsstand", in: *Ergebnisse* 26 (Arbeiterkultur in Deutschland), Hamburg 1984, S. 10
- (7) 本稿のために利用できたのは次の文献である。 *Mein Arbeitstag—mein Wochenende. 150 Berichte von Textilarbeiterinnen*, hg. v. Deutscher Textilarbeiterverband, Berlin 1930; Vorstand des Deutschen Metallarbeiterverband (Hg.), *Die Frauenarbeit in der Metallindustrie*, Stuttgart (1930); R. Kempf, *Die deutsche Frau nach der Volks-, Berufs- und Betriebszählung von 1925*, Mannheim u. a. 1931; F. Glass, D. Kische, *Die wirtschaftlichen und sozialen Verhältnisse der berufstätigen Frauen. Erhebung 1928/29 durchgeführt von der Arbeitsgemeinschaft Deutscher Frauenberufsverbände*, Berlin 1930; H. Jungst, *Die jugendliche Fabrikarbeiterin. Ein Beitrag zur Industriepädagogik*, Paderborn 1929; E. Oehlandt, *Deutsche Industriearbeiterinnen-Löhne 1928–1935*, Lostock 1937.
- (8) S. Begemann, "Familiäre Bedingungen und Zeitverhalten von Industriearbeiterinnen in den 1920er Jahren", in: *MKF* 30, 1992, S. 76–7; ある女性労

働者はこの点について端的に次のように述べている。すなわち、「男性は土曜日に出勤する必要がないときは、あちこちと出かけることができるし、家であたふたとかけずりまわる必要もない」と (*Mein Arbeitstag*, a. a. O., S. 208)。

- (9) Vgl., K. Hausen (Hg.), *Frauen suchen ihre Geschichte*, München 1987, S. 9.
- (10) D. Mühlberg, "Modernisierungstendenzen...", a. a. O., S. 47; D. ボイケルト, 前掲書, p. 82.
- (11) U. Borsdorf (Hg.), *Geschichte der deutschen Gewerkschaften. Von den Anfängen bis 1945*, Köln 1987, S. 345-6; M. Schneider, *Streit um Arbeitszeit. Geschichte des Kampfes um Arbeitszeitverkürzung in Deutschland*, Köln 1984, S. 115.
- (12) Ebd., S. 120.
- (13) H. A. Winkler, a. a. O., S. 61.
- (14) Ebd., S. 59, Tab. 7 より計算
- (15) M. Schneider, a. a. O., S. 121; D. J. K. Peukert, "Das Mädchen mit dem ›wahrlich metaphysikfreien Bubikopf‹ Jugend und Freizeit in Berlin der zwanziger Jahre", in: P. Alter (Hg.), *Im Banne der Metropolen. Berlin und London in den zwanziger Jahren*, Göttingen, Zürich 1994, S. 161.
- (16) E. C. Schöck, *Arbeitslosigkeit und Rationalisierung. Die Lage der Arbeiter und kommunistische Gewerkschaftspolitik 1920-1928*, Fr. a. M./ N. Y. 1977, S. 166; ヴァイマル時代の失業問題については以下を参照されたい。P. D. Stachura(ed.), *Unemployment and the Great Depression in Weimar Germany*, London 1986; R. J. Evans, D. Geary, *The German Unemployed*, London 1987; 拙稿「日常史をめぐる諸問題。クチンスキー『ドイツ民衆の日常史』に寄せて」(明大『政経論叢』55-1. 2, 1986) p. 293 以降。
- (17) Vgl., J. Reulecke, "›Auch unsere Körper müssen einen Sabbat, auch unsere Seelen einen Sonntag haben‹ Arbeitszeit, Freizeit, Urlaub", in: W. Ruppert (Hg.), *Die Arbeiter. Lebensformen, Alltag und Kultur*, München 1986, S. 154.
- (18) *Mein Arbeitstag*, a. a. O., S. 219; *Die Frauenarbeit in der Metallindustrie*, a. a. O., S. 101; A. Meister, *Die deutsche Industriearbeiterin. Ein Beitrag zum Problem der Frauenerwerbsarbeit*, Jena 1939, S. 80, Anm. 1.
- (19) S. Reck, *Arbeiter nach der Arbeit. Sozialhistorische Studie zur den Wandlungen des Arbeiteralltags*, Giessen 1972, S. 29; Vgl., D. Peukert, a. a. O.

- (20) D. Peukert, *Jugend zwischen Krieg und Krise. Lebenswelten von Arbeiterjungen in der Weimarer Republik*, Köln 1987, S. 243.
- (21) 余暇の持つ様々な位相については、以下を参照されたい。A. Sywotteck, "Freizeit und Freizeitgestaltung—ein Problem der Gesellschaftsgeschichte", in: *AfS* 33, 1993, S. 1ff.
- (22) Andreis Sternheim, "Zum Problem der Freizeitgestaltung", in: *Zeitschrift für Sozialforschung*, 1932, S. 339.
- (23) S. Bajohr, *Die Hälfte der Fabrik. Geschichte der Frauenarbeit in Deutschland 1914 bis 1945*, Marburg 1979, S. 18.
- (24) G. Wellner, "Industriearbeiterinnen in der Weimarer Republik: Arbeitsmarkt, Arbeit und Privatleben 1919–1933", in: *Geschichte und Gesellschaft* [G. G.], 1981, S. 535; W. Abelshauser u. a. (Hg.), *Deutsche Sozialgeschichte 1914–1945. Ein historisches Lesebuch*, München 1985, S. 108: ただし, R. Kempf の挙げている数字では女性の比率はこれより低い。Vgl., R. Kempf, a. a. O., S. 81.
- (25) Ebd., S. 33.
- (26) Vgl. S. Suhr, "Die weiblichen Angestellten", in: G. Brinker-Gabler (Hg.), *Frauenarbeit und Beruf*, Fr. a. M. 1979, S. 334.
- (27) A. Geyer, "Die Frau im Beruf", in: A. Bloss (Hg.), *Frauenfrage im Lichte des Sozialismus*, Dresden 1930, S. 210; A. Meister, a. a. O. S. 184.; H. Kaiser, *Der Einfluss industrieller Frauenarbeit auf die Gestaltung der industriellen Reservearmee in der deutschen Volkswirtschaft der Gegenwart*, Leipzig (1933), S. 42.
- (28) 以上の数字は, F. Glass, D. Kische, a. a. O. による。
- (29) F. Glass, D. Kische, a. a. O., S. 99ff.; D. Peukert, "Das Mädchen...", a. a. O., S. 162.
- (30) D. Mühlberg, "Modernisierungstendenzen", a. a. O., S. 61, Anm. 30.
- (31) *Deutsche Sozialgeschichte*, a. a. O., S. 62.
- (32) Vgl. S. Begemann, a. a. O., S. 82.
- (33) Ebd., S. 77.
- (34) Vgl., *Deutsche Sozialgeschichte*, a. a. O., S. 142ff.; I. Weyrather, *Ich bin noch aus dem vorigen Jahrhundert. Frauenleben zwischen Kaiserreich und Wirtschaftswunder*, Fr. a. M. 1985, S. 180ff.
- (35) L. Franzen-Hellersberg, *Die Jugendliche Arbeiterin*, Tübingen 1932, S. 47, zit. nach, I. Klönne, *Ich spring' in diesem Ringe Mädchen und Frauen in der*

- deutschen Jugendbewegung*, Hamburg 1990, S. 71.
- (36) E. Beck-Gernsheim, "Vom ›Dasein für andere‹, zum Anspruch auf ein Stück ›eigenes Leben‹: Individualisierungsprozess im weiblichen Lebenszusammenhang", in: *Soziale Welt*, Jg. 34 1983, H. 3, S. 321.
- (37) Ebd. 320.
- (38) 以上, W. ラカー, 前掲訳書, p. 287.
- (39) A. v. Saldern, "Massenfreizeitkultur...", a. a. O., S. 30.
- (40) Ebd.
- (41) Ebd., S. 43.
- (42) B. Murray, *Film and the Weimar Left in the Weimar Republic*, Austin 1990, S. 226.
- (43) E. Fromm, *Arbeiter und Angestellte am Vorabend des Dritten Reichs. Eine sozialpsychologische Untersuchung*, Stuttgart 1980, S. 158.
- (44) I. Weyrather, a. a. O., S. 248.
- (45) Vgl., P. Petro, *Joyless Streets. Women and Melodramatic Representation in Weimar Germany*, Princeton 1989, p. 14-17.
- (46) S. Krakauer, *Die Angestellten*, Neuaufl. Fr. a. M. 1971, S. 97.
- (47) 以上については, G. Wellner, a. a. O., S. 553ff. も参照。
- (48) W. ラカー, 前掲訳書, p. 304ff.
- (49) Vgl. McCormick, "From *Caligari* to Dietrich: Sexual, Social, and Cinematic Discourses in Weimar Film", in: *SIGNS*, Spring 1993, p. 661.
- (50) Vgl., W. Jacobsen u. a. (Hg.), *Geschichte des deutschen Films*, Stuttgart, Weimar 1993, S. 94.
- (51) H. Bernett, "Die Auseinandersetzung mit dem bürgerlichen Sport", in: H. J. Teichler, G. Hauk (Hg.), *Illustrierte Geschichte des Arbeitersports*, Bonn 1987, S. 52.
- (52) 但し, 一般的に言えば, 若い未婚女性の場合, 住宅事情が許すならば, 余暇を家族とともに過ごすことが珍しくはなかったことは, 繊維労働者の手記からも分かる。このことは余暇の過ごし方が住宅事情によっても左右されることを示している。
- (53) G. Pfister, "Die Frau im Arbeiter-Turn- und Sportbund", in: D. Blecking (Hg.), *Arbeitsport in Deutschland 1893-1933. Dokumentation und Analysen*, Köln 1983, S. 41.
- (54) H. Bernett, a. a. O.; H. Lohmann, "›Frisch-Frei-Stark und Treu‹. Die hannoversche Arbeitersportbewegung", in: A. v. Saldern u. a. (Hg.),

Wochenend & schöner Schein. Freizeit und modernes Leben in den Zwanziger Jahren, Berlin 1991, S. 67; K. Suhl, R. Meyhofer, "›Von der Wiege bis zur Bahre...‹. Die Kultur-, Freizeit- und Selbsthilfsorganisationen der sozialdemokratischen Arbeiterbewegung", in: G.-J. Glaessner u. a. (Hg.), *Studien zur Arbeiterbewegung und Arbeiterkultur in Berlin*, Berlin 1989, S. 218.

- (55) H. Lohmann, a. a. O., S. 66.
- (56) K. Suhr u. a., a. a. O., S. 212.
- (57) H. Dierker, "Theorie und Praxis des Arbeitersports in der Weimarer Republik", in: D. Blecking, a. a. O., S. 52; H. Bernett, a. a. O., S. 56-7.
- (58) K. Suhr u. a., a. a. O., S. 220ff.
- (59) Ebd., S. 233ff.; G.-J. Glaessner, "Wissen ist Macht- Macht ist Wissen. Die Kultur- und Bildungsarbeit der Berliner Arbeiterbewegung", in: ders., a. a. O., S. 241.
- (60) この点について詳しくは、拙稿 "Zur kommunistischen Frauenpolitik am Ende der Weimarer Republik. Einige Aspekte des Scheiterns der RGO-Politik", Arbeiten von Mitgliedern des Instituts für Sozialwissenschaften der Universität Mannheim, Nr. 164, Mannheim 1989, S. 7ff. を参照されたい。
- (61) *Mein Arbeitstag*, a. a. O., S. 135.
- (62) Ebd., S. 106.
- (63) Ebd. S. 201-2.
- (64) 羽仁もと子については、斉藤道子『羽仁もと子－生涯と思想』、ドメス出版 1988 年を参照されたい。
- (65) Vgl., S. Begemann, a. a. O., S. 79.
- (66) L. Braun, "Reform der Hauswirtschaft", in: G. Brinker-Gabler, a. a. O., S. 275ff; Vgl., E. Kleinau, C. Opitz (Hg.), *Geschichte der Mädchen und Frauenbildung. Bd. 2: Vom Vormärz bis zur Gegenwart*, Fr. a. M., N. Y. 1996, S. 238.
- (67) Vgl., *Mein Arbeitstag*, S. 179. KPD は主として 1928/29 年以降、ヴァイマル共和国あるいは資本主義に代わる新たなシステム (= ソヴェト・ドイツ) のモデルとしてソ連に関する宣伝を強め、その中で女性の二重負担が家事や育児の共同化によって解消されると唱えたが、労働者階級の女性の示した上に述べたような傾向からすれば、その宣伝は女性たちにとって全く魅力のないものであったであろう。
- (68) Vgl., H. Kramer, "Weibliche Büroangestellte während der Weltwirt-

- schaftskrise", in: dies. u. a., *Grenzen der Frauenlohnarbeit*, Fr. a. M., N. Y. 1986, S. 139; K. Hagemann, *Frauenalltag und Männerpolitik. Alltagsleben und gesellschaftliches Handeln von Arbeiterfrauen in der Weimarer Republik*, Bonn 1990, S. 100ff.; U. Schneider, ">Wie richte ich meine Wohnung ein?< Wohnen und Haushalt", in: Projektgruppe Arbeiterkultur Hamburg, *Vorwärts und nicht vergessen. Arbeiterkultur in Hamburg um 1930*, Hamburg 1982, S. 74ff.
- (69) Vgl., A. Neef, "Feierabend und Freizeit in Arbeiterfamilien. Kontinuität und Wandel in der Nutzung und Wertschätzung lohnarbeitsfreier Zeit in den 1920er Jahren", in: *MKF* 30, 1987, S. 70.
- (70) Ebd.
- (71) *Mein Arbeitstag*, a. a. O., S. 182.
- (72) Ebd., S. 34/5.
- (73) Ebd., S. 94.
- (74) ドイツ労働運動と女性解放の関連については、以下を参照されたい。G. Losseff-Tillmanns, *Frauenemanzipation und Gewerkschaften (1800-1975)*, Diss. Bochum 1975; W. Thonnessen, *Frauenemanzipation. Politik und Literatur der deutschen sozialdemokratie zur Fraruenbewegung 1863-1933*, Fr. a. M. 1969.
- (75) E. Fromm, a. a. O., S. 182ff.
- (76) Vgl., D. Mühlberg, "Modernisierungstendenzen", a. a. O., S. 42.
- (77) Vgl., H. Rosenbaum, "Frauenarbeit im Arbeiter-Milieu und ihre Bewertung", in: *MKF* 37, 1996, S. 627.
- (78) *Mein Arbeitstag*, a. a. O., S. 106.
- (79) Ebd., S. 157.
- (80) E. Wellenkampf, ">Mit dem Handwagen nach Grossvaters Garten...< Schrebergarten in Hannover", in: A. v. Saldern (Hg.), *Wochenende*, a. a. O. S. 51.
- (81) K. Hagemann, a. a. O., S. 344.
- (82) *Mein Arbeitstag*, a. a. O., S. 175.
- (83) *Mein Arbeitstag*, a. a. O., S. 98.
- (84) K. Hagemann, a. a. O., S. 344ff.
- (85) *Mein Arbeitstag*, a. a. O., S. 106-7.